

当社OG・佐藤多佳子さん 著
「一瞬の風になれ」（講談社）
2007年「本屋大賞」
吉川英治文学新人賞W受賞!!

書店経営が冬の時代と言われる中、作品と読者を繋ぐ活動でマスコミ等にもとりあげられ大活躍中の高橋美里さん。ときわ書房/聖蹟桜ヶ丘店の書店員であり、「本屋大賞」理事でもある彼女は一見普通の可愛らしい女性であるが、そのパワーはどこから来ているのか？



高橋 美里 さん

[目線はお客様、一冊でも多く伝えたい。]

NPO本屋大賞実行委員会 理事・ときわ書房 聖蹟桜ヶ丘店 書店員

たかはし・みさと ●児童書からライトノベルまで、広く読みあさる日々の延長線で97年より書店で働き始める。地元の小さな書店からいくつか会社を替わり、2004年に現在の職場に勤務。小説への愛は留まらず、森見登美彦氏書店応援団や道尾秀介氏の販促チームを立ち上げ他の書店を巻き込みながら書店発信型の企画を主宰している。

本屋大賞 誕生秘話

「本屋大賞」が誕生した経緯を教えて下さい

「本屋大賞」は元々作家の椎名誠さんが編集長をつとめていた『本の雑誌』（現在は、浜本茂氏が発行人・本屋大賞理事長）の営業をされている杉江由次さんと書店員があちこちで会う度に「本を売るために何か出来ないだろうか」ということを話していたことが始まりです。過去にも『白い犬とワルツを』（テリー・ケイ／新潮社）のように売り場のPOP1枚から生まれたヒット作があるように文芸書で「売り場発信」の企画をやってみたらどうか、と。だったらわかりやすく、書店員が投票を選んで、その本に賞を与えた面白いんじやないか…?などといろんな議論を経て「本屋が一番売りたい本」に「本屋大賞」の名前がつきました。

理事長の浜本さんも

「打倒・直木賞」と言ってますよね他の文学賞と違って、本屋大賞は、目線が一番読み手に近いところにある賞だと思います。作品を評価する賞ではなく、お客様に読んで欲しいから薦めるための賞なんですね。

高橋さんは理事の一人としてFM東京にもご出演されたり大活躍ですね
理事の中で一番下っ端。27歳なんです。

でも10年この仕事をしています(笑)。他の理事の方は、年上の方が多いので、先輩方と一緒に仕事が出来るこの場は、大変勉強になり、有り難いと思っています。

「売り場発信」ツールの「POP」を書くコツとは？

人によって色々とあると思います。私の場合は、まず、見出しを決めます。見出しが決まれば後は、すぐに出ます。そしてキャッチになるような「一言」を次に決めます。作品の雰囲気を大事にしたいと思っているので、作品の地続きをPOPが表すように心がけています。カラフルな視覚に訴えるようなPOPではなく足を止めて読んでもらえるようなPOPを書くようにしています。「印刷POP」は死ぬほど嫌いなので、一枚一枚が手書きです。作品を読んでいて、何を書こうかと決まっていれば1枚10分位で書いてしまいます。

ご自身のPOP作品で自信作は？

アルバイトしている頃に書いた『ミシン』（嶽本野ばら／小学館）のPOPです。自分の中で、POPを書いて上手くいったという原体験になっています。働いていた高田馬場は若い女性が凄く多くて女性に買って頂きたいと思いました。嶽本さんの作品が出始めた頃で作品も装丁も良かったし、帯が吉本ばななさんだったのでこんな売りやすい本はないと思いました。『ミシン』で嶽本野ばらさんの作品を読んだんですけど、これはPOPを書かなきやいけないって衝撃を受け



たんですよ。それでPOPを付けてみたら、バタバタ売れ出しちゃって、それで調子に乗って、店頭で大きく広げたら、もっともっとすごい勢いで売れ出しちゃって。

本との出会い

月に何冊位の本を読みますか？

毎日1冊読みます。月に30冊前後、年間350冊位になります。もともとミステリから入って来た人間でミステリ好きなんですが、青春小説・ノンフィクション・海外文芸、何でも読みます。移動時間が4時間位あるので、その時間に読みます。なので、家では殆ど読みません。12時頃出社して、閉店が夜9時というパターンが普通です。書店を出るのは、夜10時頃です。日中は、本の販売とお客様対応。受発注の作業の合間にPOP作り。時間の使い方は、そんなに上手くないと思います。要領が悪いので、いつもギリギリなんですよ(笑)。仕事を家によく持ち帰りますが、自分の時間がないとは、思っていません。好きだからこそ、時間を割いてでもやろうと思って。苦じゃないんです。「本屋大賞」の面々も多分同じだと思います。好きなことだから夜遅く集まってもやってしまう。「本屋大賞」は、NPO法人になりましたが、今もか

わらず大きなサークル活動みたいな気持ちです。

本を好きになったきっかけは？

母の影響です。母が本を読んでいるのを見て自分も読んでいました。赤川次郎さんも母が読んでいたんです。読み続けるうちに自分は、本の仕事をするんだと思っていて、図書館司書をして働いていたこともあります。でも図書館は、自分が思っていた世界と違っていたので、本屋に転がって来ました。図書館は、基本的に発信型ではなく入ってくる本を自分で選べない。本屋は、やりたい本を前に出すこともPOPをつけることも出来ます。本屋には新しい風が常にに入ってきて新鮮です。図書館は、サービス業としてのスキルは凄く高いと思いますが、刺激が少なくて。小さい頃は、「青い鳥文庫」を夢中で読みました。赤川次郎さんも小学生の頃からずっと読み続けています。なので、ちょっと謎のある作品でないと意味がないと錯覚していた時期もありました(笑)。

若手作家の応援団長

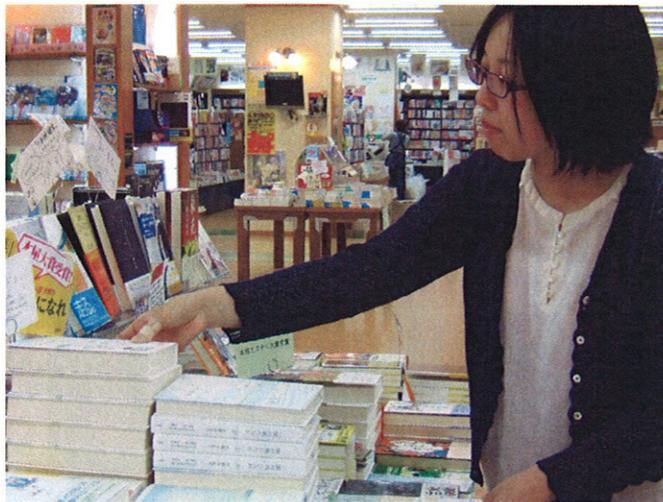
辻村深月さんに惹かれるのもミステリがお好きだからですか？最初に本の世界に入つて行ったのは、

エンターテーメント色の強い赤川次郎さんのミステリで、これは面白いと思いました。その後、海外の古典ミステリや日本のミステリを読みましたが、なかなか同世代のミステリ作家というのがいなかったんです。そんな時に辻村さんの作品が現れて。世代も近く、彼女の書く青春像に共感してしまって、今に至ります。今のところ辻村さんの著作は5作で、どれも沢山本屋に並んでいますが、書評を書いたのは私が最初だと思います。2004年冬の朝日新聞・夕刊「be」でした。それを講談社の方が見てきて、はじめてご本人とお会いました。

「ぼくのメジャースプーン」は、読んで引き込まれますよね

そうなんですよ。読みやすい上に、辻村作品はとてもドラマチックなので、長い作品でも、読者を惹きつけて離さない。「ぼくのメジャースプーン」（講談社）は、本年度の推理作家協会賞の大賞の候補にもなった作品で、最近の辻村さんは新刊が出ると注目される作家になりましたね。

辻村さんは、高橋さんに感謝してる訳ですね(笑)
そんなことないです。作品の力ですから。



平積みされた本とPOPを整える高橋さん。高橋さんが書いたPOPは盗まれてしまうこともあるそう。少し嬉しい反面、お店としては困ると、高橋さん。



店内の特設スペースに話題の本が平積みにされている。本屋大賞と吉川英治文学新人賞をW受賞し、ベストセラーになった佐藤多佳子さんの「一瞬の風になれ」も目立つように置かれている。

良い作品でも何処かで取り上げる機会がないと世に拡がらないですよね。佐藤多佳子さんの「一瞬の風になれ」の大ブレイクもTV番組や本屋大賞でとりあげた影響は大きいと…

佐藤多佳子さんは、とても良い作品を書かれて来られましたから、私たち仲間では、ずっと彼女の作品を待っていたのです。「黄色い目の魚」(新潮社)から「一瞬の風になれ」が出るまで4年間がありましたから。最近、児童文学を書かれている方が、大人向けの文芸作品を出すことが多いです。子供だけでなく大人も楽しめる作品を書く、その幅広い作風にいつも感動しています。佐藤さんが東洋ケミカルズさんでOJをされてたご経験があったなんてびっくりしました。ずっと児童文学を書いていらっしゃると思っていたものですから。女性としてもとっても謙虚で素晴らしい方ですね。

「一瞬の風になれ」の作品もとても楽しく読みました。作中の男子高校生たちが実在したらいいなあ。彼らがホントにいたらそのまま大人になって欲しいなって思いました。TBS「王様のブランチ」で特集されたのは昨年の10月28日で、発売は10月24日でした。タイミングとしても大変良かったですね。そして「本屋大賞」受賞でさらに部数をのばしています。それに「しゃべれども、

しゃべれども」も今年の5月に映画化されました。「本屋大賞」の過去の全作品が映画化されていますから、「一瞬の風になれ」も何らかのメディアミックスがあつたらいいですね。

作家・森見登美彦さんの書店販促チム「まなみ組」を創設されましたよね

あれは(立ち上げたのは)、ほんの思いつきだったんですよ(笑)。「夜は短し、歩けよ乙女」(角川書店)は、雑誌連載の頃から追いかけてました。森見さんの作品は以前から好きでしたが、「夜は短し」以前は2作品しか出版されてなく、2作品とも男子の妄想力を書いた一風かわった作品で…。なので彼の作品を好きだという熱い思いをずっと秘めていました(笑)。

ただ、「夜は短し」が雑誌に掲載された時、もしかしたら、この作品は彼の転機になるのではないか、という気がしたんです。非常にポップな作品だったし、それまでの彼の作品とちがって、今回は、主人公で彼女の目線で語られるというのも今までにない語り口だったんです。

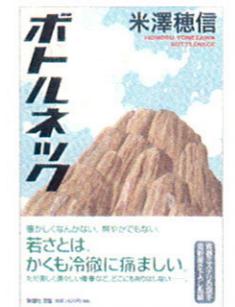
「まなみ組」の前に、道尾秀介さんの「向日葵の咲かない夏」で全国の書店を巻き込んだ「書店扇動型」フェアを私が開催して結果が出た経験があったので、もしかしたら森見さんでも上手く行くような気がしたんです。それで、「夜は短し」が本になると聞いて、何かやろうと思ったんです。そこで、書店員さんたちを口説き、角川書店さんにご協力を頂き

取り組んだ販促なんです。ご本人のブログで紹介され、凄い反響で大変でした(笑)。

高橋さんが作家の方を発掘し世に広めるのは凄いことだと思いますが、どうしてできるのでしょうか?

私が色々活動してきた多くは、若くてまだ実績が少ない作家さんたちです。面白い作品を書いているのに、若いというだけで実績がありなく、埋もれたままになっているのは、もったいないと思いました。どうしてもたくさん的人に読んで貰いたいという気持ちから書店の皆さんに協力をお願いしたのです。そんなに凄いことをやったという感じは未だないんですが…。

この人の本を好きだから売りたいという気持ちしかないんです。ハードカバーが売れにくい時代と言われてますけど、必ず文庫本になる訳でもないし、何とかハードカバーを売らなければと思っています。どうして出来るのかと聞かれれば、単純に本が好きだとしか答えられないですね。出版社からゲラを(出版前に)送っていただいて読むこともありますが、私は基本的に好きな作品でしか動かないで(笑)。だから、これからもって下さいって頼まれてやることは多分ないんじゃないかな(笑)。



「ボトルネック」
米澤穂信 著 新潮社



「東京バンドワゴン」
小路幸也 著 集英社



「ぼくのメジャースプーン」
辻村深月 著 講談社



「凍りくじら」
辻村深月 著 講談社

だから最初に信じたものが最後まで残ると信じて読んでます。

高橋美里に潜むチカラの源泉 ～お客様志向～

高橋さんの夢はですか?

夢って何かなあ。本屋に入った時から思っているのですが、一冊でも多くお客様に本を届けたいと…。それと、プロとしてお客様に応えられるスキルがもっと付けられればいいなって思っています。お客様がもっと楽しんでくれるようなこと、楽しいことをやって、間口を広くしたい。本を読むっていうのは、結構敷居が高いという感じもあると思うのでもっとお客様に気楽にページをめくる楽しさを味わって敷居を下げることが出来ればいいなって。私自身、ページをめくりながら「もうあと少しで読み終わってしまう」という感じが好きです。

本屋大賞の理事としてばかりでなくマスコミや社会に高橋さんの発言の影響力がどんどん大きくなっていますが、その点で思うことは?

そうですね。怖い感じもしています。「本屋大賞」は組織としてもしっかりしているので、たとえ私が居なくとも第5回以降も行われると思います。今、私が

個人として販促でやっていることは、言わば同人誌的な活動みたいなもので、私の行動力が大きく左右してしまいます。でも、私がやることで本が売れ、読者や作家さんや出版社の皆さんに喜んで貰えるなら、影響力が強くなる。外に出るのもいい事かなって思ったりもします。

2007年「本屋大賞」は「一瞬の風になれ」で2位は、「夜は短し」です。勿論、1位の作品の売れ行きは圧倒的で、2位以下は押されちゃうことが多いです。2位以下をどうやって売るか、私は、そこに一生懸命になりたいと思います。「夜は短し」は直木賞の候補にもなります数を伸ばしています。

最後に、女性として仕事で感じていること

この業界は、女性が永く働き続けるのが難しいと思っています。今の時代、永く働きたいって思っている女性は多いじゃないですか。その面で、もっと整備される必要があるのではないか。雑誌の誌面では、活躍するキャリア・ウーマンが最近たくさん出てきています。そんな女性を見ると、いくつになっても働けるのは、羨ましいと思うし、そなりたいなあって思います。なるべく永く売り場に立っていたいなあって…。お客様と同じ目線の中に居たいという気持ちが非常に強いんです。